
ジョーカー

焰の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカー

【NNコード】

N8310Y

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

夜、それは幻想的でミステリアスで恐怖を煽る時間。
冥界、それは罪を犯した魂を浄化する場所。

天界、それは浄化された魂を人間界に新たな命として送り込む場所。
そして、7つの罪、それは人間の心に必ず存在する大罪。
少年達は、覚悟を決め、その罪と立ち向かう。

序章の序章

ねえ、君は冥界と天界を知つていいかい？
僕の推測でもいいなら聞いてくれるかい？
ははっ、そんな嫌な顔しないでよ。

僕が思うに冥界で自分の罪を払拭し、そして、浄化した魂を天界に送る、

そして、綺麗な魂を天界が人間界に新たな命として送る。

だけどさ、よく考えてごらん？

とっても重い罪を犯した人間は、簡単に浄化できると思うかい？
もしかしたら、そんな魂は冥界に一生束縛されてるかもしれないよ？

そして、天界の住人や冥界の住人が、ホントに冥界や天界だけにいるかな？

もしかしたら人間界に遊びに来ているかもしねないよ？

だけど、そうじゃないかもしねない。

その眼で耳で、見た聞いたことが真実だ。

そして、天界が作つた、空氣や水、炎や風、もし、これらを操れる鍵が天界に

存在するとしよう、そして、それを地上にいる天界の住人がもつていたら？

その能力を開花させてもらつてもし風や炎を操れるとしたら？

魅力的じゃないか？

あれ？この手の話には飽きちゃった？
なら、別の話をしよう。

いいから、そんな嫌な顔しないでくれ。

君たちはさ、夜をどう思う？

怖い？綺麗？ミステリアス？幻想的？
もし冥界の住人が夜を好むとしたら？
そして、冥界が定める7つの罪、もしそれが
人間界に逃げ出したら？

昼間が苦手だつたら？

僕はね、夜が大好きだ。

闇にまぎれて、月夜が綺麗な・・・そんな夜が僕は大好きだ。

え？お前の好みは聞いてないって？

アハハ、まあいいじゃないか、昼間と夜、それぞれ、同じ場所でも
別の場所のように見える、まるで異世界のように・・・ね？

でもさ、月夜が綺麗なときは、つとに見惚れちゃうだろ？
それと同じ気持ちだよ、僕もそういう月夜が大好きなんだ。

さあ、幕開けだよ？

天界と冥界、裏と表、昼間と夜

人知れず戦い続ける者の覚悟とその生き様、その日常を
その物語のね・・・。

序章の序章（後書き）

さてと、初めて完全なオリジナルを書きます！
今回は超、邪氣眼な要素が入ってるかもしれないけど・・・
まあお楽しみください！！

登場人物紹介

蒼神 恭 能力 不死身くアンデット>

お気楽、能天氣な性格、焦ることはあまりない。
クラスからはヘラヘラしているバカと認識されているが
本人はあまり関心がない。

ひょんなことから冥界の『生』をつかさどる者、瑠璃を助け
一度命を失う、そして、彼女の『鍵』により
決して死れない不死の能力『不死身くアンデット』を得る。
そして、それと引き換えに7つの大罪と戦うことを決める。

咲神 拓樹 能力 音くサウンド>

笑顔を絶やすことのない心優しい少年
蒼神、緋崎、空風とは高校入学してからの友人
蒼神が戦っているところに巻き込まれ、
その場に居た天界の住人に『鍵』を
受け取るか否か、戦うか戦わないかの選択を強いられる。
そして、蒼神が戦っている罪の形を見て、
その禍々しい姿が罪の形ということを知り、戦うことを覚悟する。
蒼神が呼ぶ愛称はくロキ>

空風 和貴 能力 風くウインド>

蒼神、緋崎、咲神とは高校入学してからの友人
極度の人見知りで蒼神たち以外には心を開いてない。

咲神たちと蒼神が戦つて いるところに遭遇、咲神達とともに
天界の住人から『鍵』とともに能力を得るかを強いられる、そして、
一人で逃げたくない、もう逃げない、その覚悟を胸に戦うことを決
意する。

緋崎 敦 能力 炎くフレイム>

蒼神達とは高校入学してからの友人
咲神のボケによく突っ込みと称して頭を叩く
人見知りで特定の人間にしか心を開いていない
蒼神の戦いに遭遇してしまった緋崎達は、天界の住人から『鍵』を
開くか迷う、だが、その迷ってる間に人が死ぬと思い戦う道を選ぶ。

輪廻 瑞璃 冥界の住人

『生』の鍵をつかさどる冥界の重役の一人
人間界に逃げた7つの大罪を追いかけて いる途中
不意にその大罪の呼び出した怨霊に襲われるところを
蒼神に助けられる。

そこで、蒼神を助けるために『生』の『鍵』を開き
彼に不死身くアンデット>を与える、そして、
彼に戦いの道を示す、その後は蒼神の家に同居し
彼とともに過ごす。

桜庭 桜 天界の住人

『風』『炎』『水』『音』の『鍵』をつかさどる。蒼神と怨霊との戦いに偶然居合わせ、拓樹たちに『鍵』を開けるかどうかをたずねる。

その後、拓樹の家に居候している。

須藤 唯

普通の学生、自称『蒼神の一番の理解者』

蒼神たちと同じクラス。

西条 あづね（さいじょう あづね）

唯と親友、拓樹のことに好意を抱いている。

相場 恵

一般の学生、唯、あづねと親友、靈感がとても強く幽霊などが見える。

鍵くかぎへ

天界と冥界、それぞれが持つ。

天界は『炎』や『水』といった現代にある物質を秘めた『鍵』を持ち

その鍵を開いたとき、その鍵に秘められた力が開花され、能力を得る。

冥界は『死』や『恐怖』といった、負の表現を秘めた『鍵』、それが開かれても能力に目覚めることはない。

瑠璃、が持っていた『生』の鍵は極めて異例に蒼神と同調し、彼に不死身の能力を与える。

7つの大罪

嫉妬

人間の幸せや幸福を妬み、それが原因で罪を犯したものの魂の集合体
好戦的で残虐、人殺しをゲームのように楽しむ。
嫉妬の送り出す怨霊は誰かに嫉妬しながら死んでいった者の魂。

色欲

人間の色気、主に女性が多い罪、あまり戦いは好まず
彼女の送り出す怨霊は美しさを求めすぎたあまり
その姿は禍々しい。

強欲

何かを求めすぎて全て崩壊したものの魂の集合体

完全にこの世のもの全てを自分のものにしたがる。
彼の送り出す怨霊は何かを求める傾向にある。

暴食

全てを喰らうべくして崩壊していった魂の集合体
なんでも食べる傾向があり、そのせいか
彼が送り出す怨霊は何かを食べて食べて食べまくる。

怠惰

なんでもかんでもめんどくさがる、だが、その罪の大きさは膨大で
彼が送り出す怨霊はその怨念がとても濃い。

憤怒

怒り狂つた魂の集合体
裏切られたりさげすまれたものの魂が彼の元
それが故に彼が送り出す怨霊は7つの大罪で一番強い、
怨念が濃すぎるためパワー、スピードがとても強化されている。

傲慢

なんでもできるといつて破滅していった魂の集合体
その傲慢さが原因となつたのにも気付かないほどだ。
彼の送り出す怨霊はスピード重視で、何か早いものに取り付く傾向
がある。

怨靈

7つの大罪が送り出す罪に汚れた魂

彼らは物体に取り付き怨念を具現化させて人を襲う。
だが、活動できるのは夜、日が落ちている時間帯
なので昼間は取り付いたものの中に存在している。
人に取り付く場合はその人間を殺さないといけない。
そして、一度に二つに取り付くことは出来ないので
片方に取り付けば捨てたほうには取り付けない。
怨念が濃いければ濃いほど力を増す。

第1扉 不死身

俺の名前は蒼神 恭、特技は体力自慢、趣味はゲームそして、特徴は、絶対に死ない。

こんな自己紹介をする高校一年生がいるであろうか・・・。
だけどわあ、マジなんだよな・・・。

俺、死ねないんだよ。

正確に言えば死ぬことがない、もう死んでるし。
ギャグ的に言い換えるとゾンビってやつ?

だけどねえ、太陽の前に出ると焼く5秒で干物になっちゃうんだよ。
もともと冥界つてのは天界とは真逆の存在、天界の作り出した
太陽が冥界にとつて弱点であることに変わりはない。

で、なんでこんな話をしているかというと、俺、その冥界の力で
ゾンビになつてるのでね・・・天界の太陽が苦手なんだよ。

で、そんな俺、現在授業中。

今は英語をやつていてるがチンパンカンパンだぜ・・・留年したくな
えな。

ヽきーん!ヽーんかーん!ヽーん・・・ヽ

授業終了のチャイムが鳴り、それぞれ帰宅の準備を始める。
俺も帰宅の準備をして帰ろうとした、そのとき。

「おーい、蒼神帰るのか?なら一緒に帰るつざ~」

と、とても元気のいい声がした。

振り向くとそこには俺の悪友にして入学してからの友人

咲神 拓樹がいた、愛称は『ロキ』なんだから言わると

「ヒロキ」だから「ロキ」これでもう何ヶ月も通っているので

クラスのみんなは俺がロキと呼んだら咲神だとわかる。

「わりい、今日はチョット用事があるんだ、また明日な」

俺はそういうて学校を出る、時刻は6時、もう1ヶ月後半で

冬場なのでこの時間は課外授業が終わってからなら日は落ちている。

そして、断りをちゃんと入れてから俺は学校を出た。

俺には不死身っていう隠れた能力がある、そして、当然そんな奴が普通の学校生活を楽しんでると思うか？
ないってことや。

俺のもう一つの姿・・・。

「はははっ、今日の奴もどつても禍々しいねえ」

現在時刻9時23分、場所は人気のない住宅街

そこで俺は、ある女の子とともに、あるものと戦っていた・・・。
その姿は犬が変形した感じであり。

大きなその体の顔は人、人間の顔がすこし犬の顔に混ざったような・・・。

そして、その口はアゴと胴体部にある。

爪と牙も鋭く、普通の人間なら瞬殺だろうな・・・。

「今回は『色欲』か・・・ホントに禍々しいぜ」

俺はぼそりと呟いて一気に駆け出す

その爪が俺の腕を引き裂く、俺に痛みはない、そして、俺はちぎれた腕を

もう片方で持ち、それを投げつける。

うではそいつの頭に当たつてそいつは後ろに下がる。

俺はこころがった腕を元の位置に戻して傷を治す。

2～3秒後には元に戻った腕を俺は軽く振り回し、起き上がつたそいつを見る。

「なあ、瑠璃、こいつの魂も浄化できるのかな？」

「たぶん……でも、気をつけて」

「りょーかーい」

俺はにやりと笑つて右腕に力を溜める

「必殺！火事場の馬鹿力、改めて不死身の馬鹿力！！」

俺はいっきに飛び込み右腕を振り上げる。

――人間つてさ、すんごいピンチになつたとき力が格段に上がるじゃんか？

でもそれってさ、それって脳みそが力をセーブしていくその鍵を外した状態なんだつて。

普通の肉体じゃ耐えられないからセーブしているとか・・・。
で、俺は不死身、体が崩壊しても直るつてわけ。

だから火事場の馬鹿力・・・というよりは、ただのバ怪力を惜しみなく発動できるのさ。――

俺の右腕はそいつの頭を碎いた

赤い血飛沫が脳漿とともに俺に降り注ぐ。

そして、元の犬の姿になつたその死体からは赤い人魂が現れた。

「さあてと、色欲、この魂は俺が浄化してやる」

俺はそういうて右手を掲げる、赤い魂その右腕に吸収された。
<ドクン>と、俺の中に何かが入り込んだ感覚がした。

これで132個目。

「さて、仕事もおわったんだ、帰ろうぜ」

俺はそういうて輪廻 瑠璃にむかつて手を差し出す。

瑠璃はその手を握り、静かに微笑む。

さて、今倒したのが俺のもう一つの顔

怨靈を倒してその罪の魂を吸収し、浄化する。

そして、最終目的はその怨靈を生み出しているものを・・・

7つの罪をぶつたおすこと。

人間の7つの大罪、嫉妬、強欲、色欲、暴食、憤怒、傲慢、怠惰
冥界から逃げ出したこいつ等の鍵を破壊、または奪い冥界に戻す
これが俺の不死身と一緒に与えられた使命。

「にしても、最近は色欲出てこなかつたのにな」

俺は瑠璃に呟く

「うん、でも色欲が出たつて事は残りの罪も動き出していくんじや
ない?」

「だろうな・・・でもまつ、やるしかないっしょ

俺達はそう話しながら家に着いた

先ほど倒した怨靈は色欲が生み出したもの
美しさを追求するあまり禍々しい形になつた罪の姿・・・

「さーてとお、天界の住人方もいい加減に『鍵』の能力を開花させる人間、

探しに来てるんじゃないですか？」

俺はへラへラしながら何気なく呟いた

その瞬間、チャリン、と、何か鍵の束を落した音が聞こえた

「ん？」

俺は自宅目の前で振り返ると、長い黒髪の美少女さんが口をアワアワさせながら硬直している、そして。

「あ・・・あなた、冥界の能力者！？」
いきなり指差され叫ばれる。

「はあ？」

俺は気の抜けた返事をした。

時刻は夜中の11時、自宅のリビングにて・・・
天界の鍵の守護者さんが目の前で正座をしていた。

「まさかホントに来るなんてな・・・」

俺は唖然としながら呟いた。

すると、天界の住人は話始めた
名前は桜庭 桜 というらしい。

そして、桜は何かを考えてから話し始めた。

「いえ、私はまだ遅いほうです、もうすでに何人もの『鍵』の守護者が

その力を開花させる人間を探してます」

「ああ～だろうなあ、もともと7つの罪を追いかけるのは天界が行うつて

この前瑠璃に聞いたことがある」

俺は視線を瑠璃に移す。

瑠璃はなにやら考えているようだ。

「それで、私の『鍵』は音、風、炎、水、中でも私の本来の力は音です、それで・・・誰かいい人材はいませんか？」

「俺は派遣会社か！」

俺は一言突っ込み

桜は少し考えて

「でも私の周りの天界の人たちみんな鍵を開花する人間見つけてるんですよ」

「周り探せば見つかるはずだ、どうか探してろ
そういうて家からつまみ出す

「え！？ちょっとちょっとお～」

なにやら涙声になつているようだ
まあいいか、無視しよう・・・

すると、声は收まり桜はいなくなつていた

「ふ～、帰つてくれたか・・・」

俺は一息ついて布団にもぐる

そして、いつしか眠りについていた・・・。

そして、軽くちょっと前のことを思い出す

俺が初めて瑠璃とあつた日、そして、初めて味わった

死の感覚・・・。

俺は頭を軽く横に振り、まぶたを閉じる。

俺がこの不死身の能力を得た理由は・・・
また今度はなすことにするよ。

第1扉 不死身（後書き）

さてと・・・期末はあさつて・・・

ふはははは！現実逃避最高！！

つて自暴自棄に落ちちゃつ俺ですはい、ごめんなさい。

つと、どうでしたかな？

オリジナルだから更新速度が普通より遅いんですけどね　www

まあ頑張ります！

第2扉 始まりの夜

人間なんて、自分の事しか考えてない。
他人を平気で傷付けたり、裏切ったり、あげく自分の罪を人になす
りつけ

『僕、私は知りません』だ・・・。

そんな人間が俺は大嫌いだ。

だけど、そうじやない奴もいる。自分の罪を償い、
そして一度とそんな罪は犯さないと誓う。
そんな人間は嫌いじやない。

だから、俺の目標は『人のために動ける人間になる』だ。
たとえそれが偽善でもかまわない、誰かが笑顔でいるなら・・・。
だけど、心の中で不幸な人間をほくそ笑んでいたら?

俺は自分が嫌いになるだろう。

学校の帰り道、ボーッと公園のブランコに座つて考え込んでいた。
最近よくあるな・・・ボーッとすること・・・。
今いる場所は人気が少ない公園、時刻は9時半
2時間以上ボーッとしていたのか・・・。
俺はふと周りを見た。ただでさえ人気が少ないのでこの時間は
誰も通っていない。

「つま、当たり前か」

俺はひとり呟き公園を出た、そのときふと、何かが眼に止まつた
それは黒い影のようなもの、そして、そいつの右手と思われる部位に

なにか鋭利なものを持っていた。

いや、持っていた、というよりも一体化している?

そして、何より驚いたのはその先には俺と同じ年くらいの女の子が何も気付かないまま歩いている!

俺は彼女の身が危ないと思い彼女の元へ走った。

丁度そのとき、黒い影が鋭利な刃物を振り上げたのだ。

「きみ！危ない！！」

俺はそう叫んで黒い影が振り下ろす瞬間、彼女の間にに入った。そして・・・。

〈スパア・・・・〉

黒い影は俺の体を斜めに切った。

俺の体から赤い液体が飛び散る・・・。

それが俺の血だと分かった瞬間、体に痛みが走った。

痛い、痛いイタイイタイ！！！

体から血が止まらない、俺・・・死ぬのか？

こんなところであっけなく殺されるのか・・・？

俺は薄れ行く意識の中、助けた女の子を見た。

彼女はとても驚いた様子で俺を見ていた。

俺は力を振り絞り

「に・・・げて・・・ろ・・・つてば・・・」

そして、それを最後に、俺の意識が途絶えた。

・・・・・あれ？一二・・・一二？

俺は気がつくと真っ黒な空間にいた
体には奇妙な浮遊感がある・・・

俺・・死んだのか、ってことは天国？地獄？
ああ～もうちょっと生きていたかつたなあ・・・
あの子、逃げ切れたかな？

そう思うと、体がうずきだした

こんなところで寝ていられないと思った。

俺は体をジタバタさせた。子供のように・・・

「おきるよ！俺の体！俺は・・・」

俺は目標を達成した、人のために死んだ
なのになんだ？この違和感は・・・
もつと生きたいと願っているこの感情は・・・？

「俺はまだ！！」

これで満足だつたのか・・・？

誰かを助けて死ねた、それで満足か？

「俺はまだ・・・」こんなところで・・・

いや、俺が目標だったのはあくまで俺自身もハッピー・エンドになること・・・

「死にたくネーンだよーー！」

ハッピー・エンドを俺自身が『』の田で見るまでは・・・
それで終わるのだとしたら・・・俺にとつちやバッドエンド以外何でもない！

「俺の命を・・・あんな影野郎に終わらせたまるかーーー！」

『なり、その覚悟・・・試してみる？』

刹那、俺の頭の中に声が聞こえた、とても可憐な・・・

「つー？」

俺は頭の声に驚き言葉を一瞬失った

「覚悟・・・生きるための覚悟なら・・・いくらでもあるぜ」

俺は眩いた、すると、こきなり田の前に眩いほどの光が降り注いだ。

「つー？」

俺は目を伏せ、光が過ぎるのを待つ

光は一瞬で收まり、また暗い空間に戻る。

『とつて・・・』

頭の声がそついた、俺の目の前に一つの『鍵』が浮いていた。

俺はそれを手に取った。

すると、丁度、胸のど真ん中が光りだした

見てみる、そこにはあつたのは『鍵穴』……。

『さあ、鍵を鍵穴にわして……上手くいくかはわからないけど』

「どうこうことだ?」

『私たちの『鍵』は開花するかわからない……でも、助かるにはこれしかない』

目の前が光だし、その中から俺が助けた女の子が姿を現した

「君は……いや、瓶が声の……?」

女の子は「クリと頷む

「さあ、鍵を開けてみて、ただ、この鍵を開けるのだったら……この先戦いがあるってことを忘れないで」

女の子はただジーっと俺の目を見ていた

「私の名前は輪廻 瑠璃……眞界の『生と死』の鍵の所持者」

そうこうして俺に歩み寄る

「さあ、貴方はどうするの……? その生きる覚悟があるなら……鍵を回して?」

長い黒髪、美しくも何者も拒む赤い瞳
その瞳は俺をじっと見据えた

俺は、生きると決めた。

なら、こんなところでつまづくわけには行かない。

「ビビッてたらゲームは始らないだろ？」

「俺は生きるぜ・・・死人になろうがなんだろうがな」

そういうて鍵を胸の鍵穴に差込、回転させる。

「ガチャリ」と、鍵が回り、体の中に何かが開いた感覚がした。
そして、次第にまた意識が遠ざかっていた・・・。

鍵が開いた直前、瑠璃は眼を見開き

「適合した・・・?冥界の鍵が・・・?」

「そうなにやら呟いて

やがてハツとし、意識の失った俺に向き直る
「合格のよつね・・・なら行きましょ、彼らが待ってるわ

そういうて俺の手をつかんだ・・・。

「ん・・・くつ・・・」

俺は暗い空間から意識を取り戻し、起き上がり、周りを見た
そこには先ほどの少女、瑠璃がいた、場所は俺が死んだところだ・・・

手前を見ると、黒い影がそこにいた。

「つちい！」

俺はとつて腕で瑠璃を後ろで守るよつな体勢をとつた

「瑠璃・・・アレが戦う相手?」

「そつ・・・冥界から逃げ出した7つの罪、その罪が投げはなつた

怨靈・・・あれの罪はたぶん嫉妬

「嫉妬ねえ・・・確かに影でこそこそしそうだしな」

俺は立ち上がり腕を鳴らして

「上等、ぶつたおしてみようじゃんか

そういうて初めて黒い影、世界では化け物と呼ばれるものと対峙した
とはいっても暴力主義じゃない俺にとって化け物でも相手を殴るのは
ちよつと躊躇する。

黒い影は右手の影を先ほどと同様鋭い刃物にして切りかかる

俺はそのまま受け止めた、体に痛みはない、だが、胸にはちゃんと
黒い影の刃が刺さっている。

俺はその手をつかみ、拳を振り上げる。

こいつは俺を殺した、俺を一度バッドエンドにした元凶だ・・・
割り切れ、こいつはもう生きていない！

俺は腕を思いつきり影の首に向かつて殴り飛ばした。
<ミチリ>と、嫌な音を立てて赤い液体とともに
首が飛んだ。

影は静かに消え、そこに残ったのは赤い人魂。

「これは・・・？」

「これは、罪の魂・・・こいつはその罪を清算できずに消えていく・

・・・」

瑠璃はそいつて眼を伏せる

俺はその赤い魂を見て、何気ない一言を言った

「なあ、こいつ俺の体に入りたがってる?」

「え?」「

瑠璃は眼をぱちくじさせて魂を見る

確かに俺の体にゅうくじと近づいている。

「つちよ!まつて!」

瑠璃が止めに入ったが赤い魂は俺の体に吸い込まれるように消えた。その瞬間くズグリ>と、俺の体に何かが入り込んだ感覚がした。

瞬間、その魂が俺の体を奪おうとするのがわかった。
息が苦しくなり、指先の感覚が消えていく・・・

「ガハツ!な・・・なんだよ、俺の体を奪おうとすんじゃねえ!・・・

俺は右手で自らの腹部を裂いた

魂は俺の中で、『償いたい』ただそれを一身に伝えてきた
「償いたい?なら・・・手伝ってやるーだからさあ、俺の体をかえ
してくれないか」

俺は中の魂に向かつて叫んだ、そして、不意に頭に

『ありがとう』

と声がした。

そして、体の苦しみがなくなると同時に左目がうずきだした

「つぐ、こんどは・・なんだよ・・・また、さつきの魂か!?」

俺はうずく左目を振り払つよう頭を振つた
<カチン>と、左目が何かと呑わせた気がした

「え・・・？」

瑠璃が眼を丸くして呟いた

「ゴースト・アイ
『靈眼』？」

鏡で見た俺の左目は赤く輝いていた・・・

あとで聞いた話だけど・・・^{ゴースト・アイ}靈眼つてのは
体で浄化し、浄化した怨霊の魂を自分の力にする、きわめて珍しい
ケースらしい。

それ以前に、『冥界』の鍵が人間の力を開花させること自体が
異常なケースだ、と、輪廻 瑠璃は言っていた

俺は瑠璃とともに7つの罪を倒すと、決めたのはそのときからだつ
た。

初めて怨霊を体に取り込んだとき流れてきた感覚
<恐怖>や<絶望>に満ちていた・・・そして、『後悔』。
それらを開放できるなら・・・。

それが俺と瑠璃の、初めて出合った夜だった。

第2扉 始まりの夜（後書き）

結構2話まで書いてたからよかつたけど3話田からどうじよつ（泣）

第3扉 俺の日常(毎) 前編(前書き)

はい！なんか最近更新で着てないし
展開が速い！？って思ってるかも知んないけどー・・・
そこはまあ勘弁しといてくださいな！
頑張つて上達させていく（ついでに1話2話の編集もしておくれ）ので！！

第3扉 僕の日常（昼）前編

俺の日常は・・・大体朝6時に始る
俺が起きて、瑠璃を起こして、着替えて、朝食をとつて。

7時に家を出る。

7時半に学校に着く、俺は席に座り悪友を待ちながらゲームをする、
瑠璃は俺のまん前で本を読んでいる。

7時40分、悪友こと咲神 拓樹 緋崎 敦 空風 和貴がきた。
そして、俺の日常は始つた・・・。

「で？今日は何をするのかなあ？」

拓樹こと口キがいつものようにぼやく
こいつがこんなことを言つのはいつものこと。
すると、何かを思い出したように和貴ことカズが口を開く
「あれ？今日つて確か転校生が来るつて・・・」

「「「転校生ー!?」」」

俺、口キ、緋崎の声がかぶさつた
転校生かあ、この時期に珍しいな・・・。

「でもさ、なんでカズちゃんがそんなことしつてんの？」
俺は疑問をカズに問いかける

カズは表情を変えずに

「そこで、先生と見知らぬ女の子が話してたから、校章は1年生だ
つたけど

見ない顔だつたし

「 「 「なるほど・・・」 」 」

ヤツパリかぶる俺達3人

気が合うのか会わないのか・・・（笑）

俺は、高校入学時にこいつ等に出会えてよかつたなあと、今でも時々思つ

カズちゃんは俺達以外にはあまり口を利かないし、緋崎もそれにしきり、

ロキは工口発言バツカだけど周囲を和ませるオーラつてのがある。

みんな俺にはないものを持つていてる・・・。
だから一緒にいるのかもな。

そんなことを考えると

〈キーーーンコーーーンカーーーンコーーーン〉

「あつ

「チャイムだ

「先生だ」

上から緋崎、ロキ、俺、カズはちゃっかり席に戻っている
おのれ・・・と、心でのろいながら席に戻る

先生は教壇に立つと気持ちの悪いほど笑みを浮かべ

「今日は転校生さんを紹介します、さ、はいってはいって」と、先生にそそのかされておおずおおずと入ってきたのは・・・。

「可愛いな

と、俺が思わず呟いた、俺はそれに気がつき5秒で赤面

「城野

沙織

です、天道高校から転校してきました。

これから冥府学園の皆さんと仲良くしたいです。よろしくお願ひします

と、沙織は一寧に頭を下げた、その姿はとても可愛らしく
髪は黒く肩まで伸ばしている、あまり大きくない眼鏡をかけていて
鼻先で支えている

ちょうど眼鏡がよくずれるのかずれた眼鏡を少し大きい制服の裾か
らちょっと出た指で直す。
それもまた可愛く見える。

沙織は俺のほうを見て、何を思ったのかニコニコと笑いかけた
俺は一瞬戸惑いながらも笑い返す。

その様子を後ろで見ていたカズは

「おーーこり、テメもう眼をつけたのか？変態め」「
「ショッパンで罵倒されるほど変なことは考えてなどいない」

と、小声のやり取りをした・・・。

俺ってそんなに変態に見えるのか？冥府学園一年生5クラス全てに
聞いてみようか・・・。

などと馬鹿なことを考えていると

H.Rも終わり、俺はいつものように窓側のロキのところに行こうとしたところ

突然声をかけられた。

「あの、蒼神くん・・・ですよね？」

突然声をかけられたので誰かな？と思い

「はい？」

と、ちょっとマヌケな声を出しちゃつた、

振り向くとそこには沙織がいた、ワザワザ名指しつて、何の用だろう・・・?

「えっと、よければ学校を案内してもらえると嬉しいんですけど……」

眼鏡のフレーム越しの上田遣いで見られたら断りづらい・・・俺は周りの『なんでテメエが!』という男子の嫉妬の視線を頑張つて耐えながら

と自分以外の人間にやらせよ」とした。たゞて……この視線痛いんだもん。

だが、沙織は10秒と立たずに

「一 蒼神くんがいいからです」「

言い切つた、言い切りやがつた、後ろの嫉妬が殺意に変わつた

いくら俺でも怨霊じゃない魂は浄化できません！――

幸い今は昼休み、まだまだ時間は・・・うん40分近くある

俺は沙織の手をつかみ

「それじゃ行けりつー・すぐ行けりつー・俺が殺されなこつちー・！」

そういうて駆け出した。

『おい！推進エンジンを付ける！』と、とてもなくえぐい

言葉が並べられていたがとりあえず無視！怖いから……。つていうか推進エンジンって……どうやって作るんだよそんなもの

俺はこの後の俺の状態（ずっとたずたにされるであらつ悲惨な光景）を思い浮かべながら

一通りの案内を終えて屋上に出た

「こじが最後、俺のお気に入りの場所、あんまし人いないからさあ

俺はすこし笑いながら沙織に向き直る

沙織は、こちらを凝視していた、なにかに取り付かれたかのよう

・。

「城野さん？」

俺は沙織の肩を軽く揺らす、するとハツとなつて我に返った

「は、はひい！？」

声が裏返った沙織は俺を見て今度は赤面して

ボーッとしたり顔を赤くしたり忙しいなこの子。

「え・・えっと蒼神くん？」

「ん？どうした？」

沙織はすこしモジモジと指をもてあそびながら

「私のことは沙織でいいですよ？」

そういうつてまた必殺上田遣いで俺を見た

「へ？・・・・ど、どうして？」

いくら俺でも混乱する、初めて会った女子に学校の案内を描名されて

あげく面前で呼んでくださいだと！？

普通の男なら卒倒してるだ！？

いや、俺も普通の男だけども、ん？不死身って普通の男に入るのかな？

などと考えてると沙織が口を開いた

「いえ、直感的に・・・その・・・名前で呼んでほしくて」

と、赤面で言うもんだから困つたものだ

直感的に男の人に名前で呼んで欲しいなんて子はそういうこない。だからなのか断りづらい、っていうか断つたら泣かれそうでどうに怖い

と、言つわけで約30秒の悩みの末出した結論が

「わかったよ、あ、れお、、、沙織・・・」

「今まで赤面する、瑠璃の時は平気なのにあ・・・なんでだろ？」

沙織はすく幸せそうな顔になり

「ありがとうーなら私もきょーくんって呼ぶー」

と、またしても普通に爆弾発言をした。

これ・・・クラス帰つたら殺されるな・・・ははは

「そ、まあいいか、俺のことはなんとでも呼べ、でも、何で俺なんだ？」

「え？」

「学校案内、女の子をおつかやえれば友達の和も広がるだろ！」
俺は一番聞きたかった質問を沙織にぶつけた。

沙織は少し下を向いて喰らい口調になり

「うん・・・ちょっとね、でもきょーくんは学校の中でも孤立して
いるって聞いて」

誰からの情報だコラ、今の俺はそんな淋しい高校生活はしてない!
中学のときならともかく・・・
と、思いながらボソッと

「それに・・・だし・・・」

と、沙織が呟いたのが聞こえた、だが、そのときの声だけは
何か、とても恐ろしく感じた、何かに取り付かれているよつな・・・
先ほどと同じ違和感。

だが、次にはせられたのは元の沙織の声だった、しかも内容がどん
でもなかつた。

「でも私わかるんだ!私はきょーくんが好きだつてこと!」

「ドクン」と、死人の心臓が高鳴った、いきなり告白された
何をもつてそんなことを言ったのかは知らない・・・
いきなりすぎて頭がまっしろになつた。

「い・・・きなり何を言い出すのかな・・・?」

と、そこまで言つたとこで「キーン」「ーンカーン」「ーン」と
昼休み終了のチャイムが鳴つた。

「つあ、チャイムだよ、行こう?きょーくん」

そりいつて今度は俺が手を引かれる形となつて、教室に戻つた。
そのときふと、彼女の手が少し冷たく感じられた・・・。

第4扉 僕の日常（昼）後編

「…………で？これは一体全体どうこう状況？」

俺は沙織とあの後教室に戻り、男子からの妬みの視線を交わしつつ授業を受け、帰りのHRも終わった。

で、そこまではいいさ、別に全ては想定内、切り抜ける予測は出来ていた。

そんで、メチャクチャ想定外のは……

「で？沙織、いつまで俺の腕から離れないつもり？」

俺は腕に文字どおり抱きついている美少女転校生、沙織に話しかけていた

周りの男子は騒然、妬みを通り越して
もはや絶望状態、で、俺の心理状況も絶望だ。

で、俺は仕方がないのでこのまま引きずってでも帰ることにした。
かばんを持ち教室を出ようとすると、すると、後ろから

「つよ、今から帰りか？」

と、すばらしくくらい能天気な声が聞こえた
振り返ると、そこには口キがいた。

「つち、んだよテメエか」

俺は毒づきながら帰ろうとする、口キは慌てて

「わーーごめんつてごめん！冷やかしでも何でもねえつて…帰ろつ
ぜ！」

と、俺のかばんを引っ張り始めた

俺は一瞬後ろに倒れそうになり踏ん張る

「アブネエな、つたく、この人が一緒でもイならいいぜ？」

俺は腕をくいとあげ、沙織を見せる
口キは満面の笑みで

「無問題さーんじゃ いこつぜ」
と笑顔で教室を出た、俺達はそれについていく
「あれ？ 緋崎と空風は？」

「ん、緋崎は田真、空風は一菅の奴に捕まつたよ」

「げつ、マジかよ」

と、会話しながら階段を下りる。

一菅とは俺達と同じクラスで俺達4人が敬遠している人間だ。

本名は一菅 涼太ひとすが りょうた

彼は勝手に切れたり周りに無関係な自己主張が激しく、俺達4人は嫌っている

何よりも知ったかぶり、ガセネタ、コビ売り、と。

俺が嫌いな三色もつていて、そしてなにより力を持ったときだけはすごくえらううなのだ、たとえばドッヂボールで誰かを当てたときとか

サッカーでボールをとつたときなどだ。

簡単に書けば邪氣のある子供だ。

そして、何より気に食わるのが奴は俺がいないときは口キたちに近寄つて知つたかぶりを披露するのに
俺が近寄つたとたんに離れていく。

だから俺は特別嫌いなのだ、だが、一菅は自覚がないので
学校帰りなど俺達の後ろをよくストーキングする。
困つたもんだよ・・・。

「そういうえば空風をカズちゃんって呼ばないんだ？」
口キがいきなり話題を変更して切り出した

「ああ？ 空風の奴そのあだ名で呼んだら怒るんだもん」

俺は頬を膨らませ、ブー、と咳く

後ろで口キが「しゃーねーよ」と苦笑いした。

そして、俺は昇降口を出るとこりである違和感に気付いた。

目の前を横切っていた男子が沙織を見て
一緒にいた奴らとヒソヒソ話し始めたのだ、それ自体はまあ状態が
状態
だから不思議はないはず、だけど、そのときの視線に俺は嫌な雰囲
気を感じた。

なんつーか胸の中がもやもやするような・・・。

俺は自分のもやもやを振り払い3人で校門を出た、
そこで俺は泣きたくなってしまった。

「マジかよ・・・」

俺は思わず呟いていた。

そこにいたのは天界の鍵の所持者、桜庭 桜だった。
しかもウチの学校の制服だ。

桜は俺に気がつくとテクテク近寄り

「で？ いい人はいましたか？」
と、いきなり言い出したのだ。

俺は一瞬頭が真っ白になりすぐに再起動をさせて

「なんでウチの学校の制服を着ていいの？」

「私だつてこここの生徒ですよ、1年4組桜庭 桜です」

「お前なあ、・・・・と、紹介するよ口キ、友達の桜庭 桜
俺は口キに桜を紹介することにした。

苦肉の策としてだ、このままだったら鍵のこと言いそうだし・・・。
そう思いながら行つた自己紹介だが、俺の予想の斜め上の展開を見
せた

口キは顔を赤らめ

「は、初めまして、咲神 拓樹です」

と、頭を下げる、こいつのこんな姿はじめて見た。

一日惚れしたのか・・・?

と思いながら桜を見ると

桜も顔を赤らめ

「さ、桜庭 桜でしゅーよ、ようしゅ もゆ」

と、噛み噛みみな自身紹介をした。

・・・・・こいつら、意外に相性いいのかな？

「それじゃ、俺はちょっと用事があるから、桜、口キ、また明日学
校で」

そういうつて俺と沙織は一人から逃げた。

別れ際に口キガ

「つあーお前、今日の夜三丁目公園に集合だぞー忘れるなよー。」

「つょーかーい！」

俺達は今夜、三丁目公園でちょっととしたゲームをすることになつていた。

冬の肝試しだ。

ちよつと公園の近くに廃校になつた小学校があるのでそこでもしそうとこいつになつていていたのだ。

今から楽しみでしようがないぜ

俺は胸を躍らせながら家に着いた・・・。

「なーんで沙織までいるんだらうね？」

自宅のリビングにて、きょとんとした顔の瑠璃、満面の笑みを浮かべる沙織がいた。

「えへ、いいじゃない」

そういうながら眼鏡を元の位置に戻す

「よくねえよー帰れよー。」

「えー?きょーくん私が嫌いなの?」

と、急に涙目になつて聞いてくる

「急にそんなこと聞いてんじゃねえ!ー!ー!ー!ー!ー!

と、今回はしつかりとつっこみを入れた

「今日は夜あいつ等と約束があるからさ、な?」

と、今夜の約束を話すと

「ふー、わかったー、なら明日はお泊りしてもいいー…？」

「話を飛躍させるなーー！」

俺の突つ込み虚しく、結局明日沙織は泊まりに来ることになってしまった。

瑠璃に任せるとしよう。

そう思いながら沙織を駅まで見送り、俺はそのまま公園に向かった後ろからは瑠璃がついて着ている。

理由はただ一つ、怨霊が要るかどうかのチェックのためだ。

俺の靈眼は気配までは察知できない、あくまで浄化してそれを力にすることだけだ。

怨霊を感じ取るには瑠璃が必要なのだ。

「そんじゃ、何かあつたら連絡してね」

「わかつたわ、気をつけて」

俺は瑠璃に手を振り公園に向かった。

第4扉 俺の日常（毎）後編（後書き）

やつべえ！数学赤点を取つてしまつたwww

保守かなー？補修かなー？

第5扉 僕の日常（夜）前編

「おおっすー待たせたか？待つてないな？よしー。」

俺は沙織を駅まで送り届けたあと約束の公園に向かった。すると、田の前には口キがぶつちゅうずらりでPUPPをしていた

「おせえよーさみいんだから待たせるなよー。」

寒さで言葉がおかしくなっているぜ？ 口キ・・・。

「ワリイワリイ、沙織を駅まで送つてたら時間取つちゃってそういうながら緋崎と空風にも眼をやる。そのとき、ある違和感に気がついた。

「口キ、後ろのそいつ・・・だれ？」

口キの後ろに誰だかわからない人影がくつついていたのだ

「あ？ ああ、桜」

「はあー！？」

俺は口キが言った言葉にビックリ仰天、桜つて・・・。

「なんで一緒にいるんだよそして誰も突つまねえんだよー。」

俺は現れた桜に田をやりながら緋崎たちに聞いかける

「いや、咲神がどうしてもつて」

「いいんじゃね？ 花があつたほうが盛り上がるし

「やつひつ問題じやねえー！」

ちなみに順番は緋崎、空風、俺だ。

「第一！これから肝試しに行くんだぜ？それなのにつ・・・」

俺は次の言葉を発しようとしたとき、違和感が、いや、何かの気配を感じた。

その気配は殺意がこもっている、ここにいたらやべえな・・・。

「わかった、桜も同伴な、いくぞ」

俺達は急いでその場を後にした。

「　　何　　怖　　」

ついた瞬間に俺達5人は同時に言葉が出た
割れた窓、湿った校舎、真っ暗な校内・・・

「なんかでそうじやね？」

と、口キ

「だからいくんだろう？」

と、空風

「俺腹痛いから帰つていい？」

と、緋崎

「帰つてもいいけどその場合は俺が直々に殺す

と、俺

「楽しそうですね」

と、桜

ルールは俺達一人一人で、といった鬼畜の所業はせず
みんなで中を探検する、出たら出たで全力で逃げる。
とってもわかりやすいプランだ。

「んじゅ、いじりうぜ」

俺は懐中電灯を振り回しながらいった。

「マジで?」

ロキはぶるぶる震えながらいじみを見る

「マジで」

俺はためらい泣く答えを言い放つ

俺達は校舎に入り、まず職員室を手指した
懐中電灯一本、残りは月明かりといったホラー丸出しのシュチュエーショングだ。

「いじゅじゅね? 職員室」

そういうてドアを開けた、そこには、カビの生えた机や
書類などが残っていた

「ひつわ、きつたねえな~」

俺は何かの名簿っぽいものを手にして呟いた

「ああ、っていうかマジで出そつだな」

「出るんじゅね?」

と、バカ話をしていた、そのとき。

〈ガツシャー——ン!〉

「つー?」

何かが割れる音、そして、何かが入ってきた音がした。

「なつなんだよー?」

「警察かー?」

「ばか! 警察があんな乱暴に入るかよー」

「じゃあなんだよー!」

俺達はびくびくしながらそつとドアから外を覗いた。

そこで眼にしたのは・・・・・。

人の形をしている、だが、その体は赤く、まるで人間の皮膚を引き剥がしたような感じだ。

顔には頭皮も髪も何もなく、脳のような物体がまぶたのところまで覆っている。

間違いない、怨霊だ・・・。

俺がそう判断したそのとき、うかつにも口キが

「わあああああ！ば、化け物！！」

と、大声で叫んでしまったのだ。

怨霊の目線はこちらに切り替わり、歩いてきた

「つち！お前等！外に出ろ！早く！」

俺は手元にあつたイスを投げつけ紺崎たちに向かって叫んだ

「お前は！？」

口キが聞く、俺は不敵な笑みをつかべ

「俺もすぐに行くっての、死亡フラグは立たないから安心しろ」

そういうつて怨霊に向かう

「消えてろこのー！」

そういうつて拳を振り上げるが・・・

「あれ？」

俺の拳を空振りしていた。

そんな、全力で殴ったのに？スピードが速すぎる・・・

「まさか・・・てめえ・・・・」

俺は一度だけ、瑠璃に忠告を受けたことがある

『いい？スピードが速い怨靈は要注意よ、怠惰か憤怒、力も強かつたら憤怒だから』

『憤怒は怨靈の中で一番強いものをしてくる』

「これが憤怒かよ・・・」

俺は外を確認した、口キたちが逃げていれば・・・『アレ』が使えるのに・・・。

だが、口キたちは校舎からちよつと離れたところにいる、なぜ！？

「マジかよ！つくそ！」

俺は靈眼を開花させ、頭の中でイメージした。

ここで『アレ』を使うなんてな・・・。

全力で撃てば倒せるだろう、だがしかしあいつ等に俺の正体がばれるかもしれない、・・・でもやるしかないか！

俺は頭の中で瑠璃に言われたとおりのイメージをした。

大きな器、その中に怨靈の魂を注ぎ込む・・・

そして、怨靈の浄化した魂・・・罪を償うその心で・・・力を！

「いつも派手にいこつか、靈炎くゴーストフレイムへーーー！」

俺の右腕左腕から、虹色の炎が勢いよく飛び出した。

これは、俺の靈眼が開花しているときのみ使える俺の特殊能力の一つ取り込んだ魂の償いたいという心が生んだ炎
靈炎くゴーストフレイムへーーー。

「出来る限り時間稼いでやつから・・・早く逃げてくれよ・・・」

俺は咳いて、憤怒の怨靈に向かって走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8310y/>

ジョーカー

2011年12月16日17時56分発行